



心、今までありがとう 必ずお父さんになってね!

夏休み明けから、雄ヤギの「心」が、母ヤギの「さくら」を追いかけて、姉ヤギの「優」に何度も頭突きをしたりする姿を見た子どもたちは、これからの生活をどうしていくのが良いのか、何度も何度も話し合いを重ねていきました。その中で、子どもたちは、小谷村に住む宮嶋さんに心を託したいという気持ちが高まっていきました。しかし、すぐに決断ができたわけではありません。常に、様々な気持ちを行きつ戻りつさせながら、自分の気持ちに整理をつけていきました。その中で、Tくんは、自身のこれまでの生活を振り返り、以下のように綴りました。

ぼくは、接し方を大切に桜一家の親になったつもりで今まで生活をしてきました。いっしょにいられるということは、当たり前じゃないと思います。来たいけれど来られない人だっているんだから、いっしょにいるということは、すばらしいことだと思います。ステイホーム中、さくらに会えなくて残念でした。だけど、ぼくの心の中にさくらがいたから、たえきれました。いっしょになくても、いっしょにいるような感じがしました。親は、今でもどこでも子どものことを考えてくれている。でも、少しずつぼくは、さくらたちの家族になれている気がします。だから、ぼくは、いっしょのメンバーって言っていた宮嶋さんに心くんのことを託したいです。ぼくは、最初、さくらちゃんがこわかったです。でも、だんだんいっしょに散歩をしていくうちに、こわいのはだいたいなくなりました。ぼくは、一番さくら一家の幸せを願っています。心くんは、お父さんになってほしい。優ちゃんは、お母さんになってほしい。さくらは、毎日健康でいてほしいです。

本来であれば、引き取り先の宮嶋さんのお宅まで行き、どのような場所で生活するのかを見届けてくる予定でした。しかし、急遽、コロナウィルスの警戒レベルが4になってしまったことで、小谷村まで行くことが出来なくなってしまいました。さらに、その旨を宮嶋さんに伝えると、「11月17日(火)に長野市に行く用事がある…」とのこと。あれよあれよと、17日が3頭で過ごす最後の一日になってしまいました。16日(月)は、しっかりと手紙を書く日、17日はお別れをする日と決め、動き出していきました。心に手紙を書いた子どもたちの文面を見ながら、すごいなあと感心させられたことがありました。それは、多くの子どもたちが『心くん、生まれてきてくれてありがとう』と書いてあったことです。なぜ、子どもたちがそういう思いになったのか、本当のところまでは推し量ることはできませんが、もしかしたら、心の誕生の時のことまで思い出していたのでしょうか。心は、生まれてくる時、なかなか出てきませんでした。本来であれば、介助しない方がよかったのかもしれませんが、教師はそこに一歩踏み出し、心を引っ張り出しました。子どもたちは、そのことがあったからなのかもしれませんし、臨時休業中の出産だったことも影響しているのかもしれません。子どもたちの言葉ひとつひとつに、心を思う気持ちがあふれていました。

迎えた17日。子どもたちは、朝から寸暇を惜しむように、小屋の周りに集まり、一人一人でお別れに向けての準備を進めていました。いよいよお別れの時が来ました。宮嶋さんは、「こんな立派な雄ヤギは見たことがありません。しっかりとお世話をしてきたことがよく分かりますね」と言われると、子どもたちは、少しハニカミながら、でもとても嬉しそうに顔をしていました。そして、トラックが動き始めると、それに合わせてさくらも子どもたちと一緒に駆けだして行きました。その姿に、さくらは、やっぱり母親だったのだと思い知らされました。最近では、さくらと心が一緒になると、すぐに頭突きをしたり、心がさくらを追いかけて回したり、一歩間違えば親子で交尾を…と冷や冷やする思いで見っていました。そのさくらが…と思うと、さくらは心のことをちゃんと送り出そうとしてくれたのかな?とも思っていました。見送りできるギリギリのところまで見送り、子どもたちは小屋へ戻って行きました。初めは泣いていなかった子どもたち。けれども、小屋が近づけば近づくほどにその鳴き声は大きくなり、心の小屋を囲むように子どもたちは泣き続けていました。「心がない」という現実。その現実を目の当たりにした子どもたち。この時が、子どもたちにとって別れを実感した時だったのかもしれません。

